

生きてさえいれば、人は何者でもある。

小野寺史宜『ライフ』

アルバイトを掛け持ちしながら独り暮らしを続けてきた井川幹太27歳。気楽なアパート暮らしのはずが、引っ越してきた「戸田さん」と望まぬ付き合いがはじまる。夫婦喧嘩から育児まで、あけっぴろげな隣人から頼りにされていく幹太。やがて幹太は自分のなかで押し殺してきたひとつの「願い」に気づいていく——。誰にも頼らず、ひとりで生きられればいいと思っていた青年が、新たな一步を踏み出すまでを描いた胸熱くなる青春小説。

(ポプラ社HP「書籍の内容」より転載)

北海道を離れて埼玉の大学に通った4年間は今も僕の中で特別の時間だ。正直に言えば、大学に入った、というより寮に入ったというのがふさわしい4年間だった。

その学生寮は男子寮と女子寮が食堂で繋がっていた。女子は男子寮に自由に行き来できるけれど男子は女子寮には入れない(当たり前か)。この微妙な距離感が色んなドラマを生み出すことになるのだが、それはまた別の話。

さて男子寮は4人部屋が基本。そこに3～4人で住む。日本全国から集まってきた生育環境も文化も違う青春まっただ中の男子が300人以上(もっとだった気もするが)いるのだから、それはそれは筆舌に尽くしがたい濃厚な人間関係が否応なく展開される。毎日が修学旅行である。

そんな中、仲間の一人が大学で学ぶ意味がわからなくなったと言って講義に出ずに寮に引き籠もってしまった。といっても寮である。そいつがいる部屋に人が自然と集まって、麻雀をやったり、当時売り出したばかりのドラクエをやり出したり、一人で悩む時間さえ持てないような状態であった。しまいには、誰かがそいつを救いたすためにみんなで映画を作ろうと言いだし、当時流行った映画のパロディー版を作った。また、そいつがギターを弾いていたので、寮祭(寮版学校祭みたいなもの)で音楽サークルを立ち上げたりもした。

今振り返ると、なんともすさまじいエネルギーである。あの頃は「何をやってもやれる」という妙な自信があった。ただ、残念なことに「これをやりたい」という確かなものは僕にはなかった。引き籠もりの彼はやがて音楽の道を本気で追い求めようとする決意を固め、大学を辞めてしまった。その決意と行動力をどこか羨ましく思う自分がいたことは確かだった。

小野寺史宜さんの『ライフ』にこんな言葉がある。

「やりたいことが特別なことである必要はないんだよなあ……(中略)……それは要するに、やりたいことがないのはダメだと思っていたことなのね。やりたいことが何もない自分はダメだと思っちゃうていう。で、それは要するに特別なことをやりたいと思てなきゃダメだってことなの」

「生きてさえいれば、人は何者でもあります」

目標とか夢とかを聞かれると、何か特別なことを言わなくてはならないような気がしてくる。推薦入試ならばオンリーワンをアピールしないとイケないような気もするが、普通に生きていくのにそんな特別である必要なんてない。普通に生きることの難しさは人生重ねていけばいくほど身に沁みてわかるものなのだ。

「結局、人の役に立たない仕事なんてないだけだな……(中略)……人一人にできることは限られてるから。仕事をするうえで大事なものは、大きなものを見すぎないこと」

『ライフ』の主人公は、たまたま同じアパートに住むことになった住民たちと半ば強制的に交流させられた結果、少しずつ変化していく。ICTが発達した現代社会では、人と繋がらずに生きていける時代なのかもしれないけれど、やはり人との関わりの中で人は成長していくものだと思う。人との出会いの連続が人生そのもの。新たな生活を迎えようとする君たちにも素晴らしい出会いがあることを願う。

ちなみに辞めていった彼も含めて寮の仲間たちとは未だに付き合いがある。一生の付き合いができる仲間を持って幸せだと今つくづく思う。

